グローバル化するクアラルンプル周辺地域のオランアスリ

―半島マレーシア先住民社会の現在と彼らの土地をめぐるせめぎあい―

藤　巻　正　己

Ⅰ．はじめに

本稿では，マレー半島の先住民であるオランアスリ，とくにマレーシアの首都クアラルンプル（以下，KL）周辺地域のオランアスリ村の今日的状況について関心が払われる。

オランアスリは，マレーシア語で*Orang Asli*と表記される。*Orang*は「人々」，*Asli*は「元々の（original）／先住の（indigenous）／原住の（aboriginal）」を意味する[1)]。オランアスリは，マレー人およびその他先住諸民族とともに「ブミプトラ」（*Bumiputera*：大地の子＝先住民）という，華人やインド系という移民集団の末裔に対抗して政治的意図から設けられたエスニックカテゴリーの中に含まれている[2)]。しかし，オランアスリ人口は，1991年センサスによれば９万8494人，また2000年のJHEOA（オランアスリ問題局）の調べでは13万2873人でしかないため[3)]，東マレーシア・サラワク州のダヤク（Dayaks），イバン（Iban），ビダユ（Bidayuh）など，サバ州のカダザン（Kadazan），ムルト（Murut），バジャウ（Bajaus）などの先住諸民族とともに公式統計上「その他ブミプトラ」という副次的な分類付けがなされてきた。1957年にマラヤ連邦として独立して以来，政治的実権を掌握し，マレーシアの主住民を自称してきたマレー人は，華人やインド系に対して，「ブミプトラ」であることを，政治社会的意味あいを込めて主張するが，オランアスリは，東マレーシアの先住諸民族とともに，マレー人以前の先着・先住者してきた人々であるという点において，文字通りの「原住民」あるいは「先住民」と言ってよい。

マレー半島内陸の山地や沿岸部の密林地帯における狩猟採集民，焼畑耕作民あるいは漁民として独自の歴史・生活文化を保持してきたオランアスリについては，すでに生態人類学や文化人類学の分野で数多くの調査研究が行われてきた。それらの多くは，密林の中で竹やニッパヤシの小さな高床式家屋に住み，長い吹き矢で密林の獲物を射落として暮らす「自然の民」あるいは「密林の民」としてのオランアスリとそのコミュニティの固有な生活世界に関する「人類学的」研究であった。しかし，近年，主流社会への統合（同化）政策や開発プロジェクトに翻弄されるオランアスリの人権に関わる問題をテーマにした研究，人間社会と環境との調和を破壊する開発至上主義に対抗するオルタナティブな生活思想復興の起点をオランアスリの人々の伝統的な知恵に求めようとの立場からの研究が，基調を成しつつある[4)]。また，世界的に少数先住民の精神・物質文化や，彼らが生活領域とする自然環境の破壊に対する関心が高まる中で，新聞やTVなどのマスメディアを通じて，オランアスリ固有の伝統的生活文化の紹介や，貧困・子供たちの教育をめぐる問題など，さまざまな切り口でオランアスリに関する特集が頻繁に報道されるようになった。

実際，1980年代以降，オランアスリの生活領域であった密林地帯は，ダムや高速道路，プランテーション，ニュータウン，ゴルフコース，リゾートの開発プロジェクトに取り込まれるようになり，彼らの生活空間は急速かつ大きく変わることを余儀なくされつつある。「主流世界への合流（統合）」

政策の名のもと，あるいはさまざまな開発プロジェクトに伴う立ち退きにより，新たな村への移住を余儀なくされたり，プランテーション労働力および近隣の工場やホテルなどのサービス産業への就労参加へと誘導されたりするようになったからである。言い換えれば，オランアスリは，もはや主流社会から隔絶された「密林の民」としてだけとらえられるべき存在ではなくなったのである。こうして，「主流（都市）社会経済との関わりの中で暮らさざるをえなくなったオランアスリ」，「都市化するオランアスリ」あるいは「都市のオランアスリ」という新たな視点からのアプローチが求められるべき時代を迎えている，と言えよう。

Ⅱ．周辺的コミュニティとしてのオランアスリ

１．オランアスリのグループ・地理的分布

オランアスリは一つの固有の種族名称あるいはエスニック集団名称ではない。少なくとも民族学的に，またマレーシア政府の公式統計的には，北部･中部の移動採集･狩猟民であるネグリト（Negrito），中央部の丘陵地帯における焼畑農耕民であるセノイ（Senoi），南部の農耕・森林産物採集民あるいは漁業･交易民であるプロトマレー（Proto–Malay）と指称される３グループの総称であり，さらに各グループは第１表にみるように18のサブ・グループから構成されている。さらに，それらのグループは，地域的まとまりをもって分布してきた（第１図）。

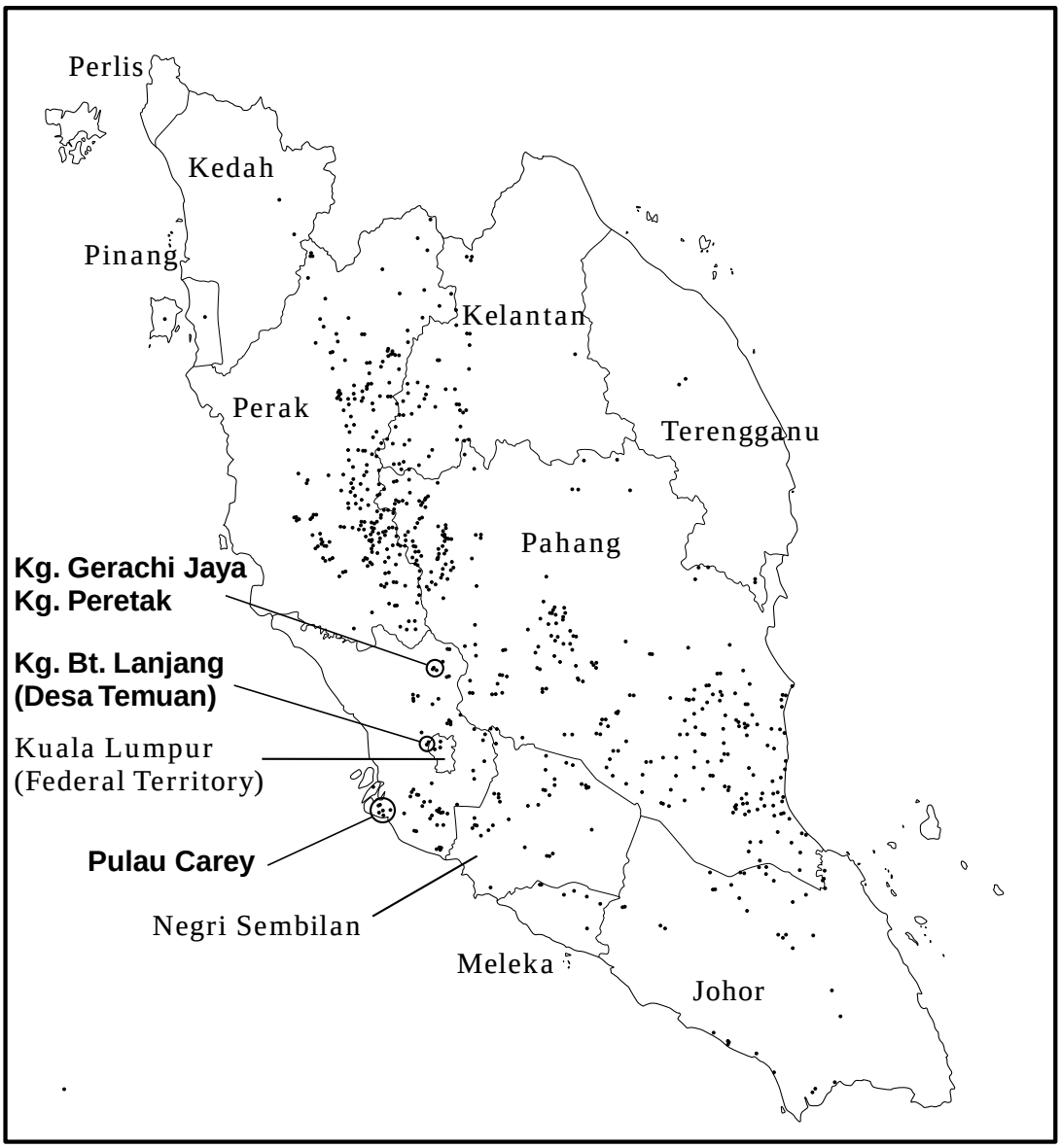
オランアスリの州別分布状況をみた場合，1993年のJHEOA調べによると（合計９万2529人），中央山地を州域内に有すパハン州（３万4000人，35％），ペラ州（２万6000人，31％），KL大都市地域を囲繞するスランゴール州（１万人，11％）に多く分布し，これら３州だけで77％の割合を占める

第１表　半島マレーシアにおけるオランアスリ：エスニック集団別・州別人口数（1993年）

Ethnic Group	NEGRITO						SENOI					
Sub-Group	Kensin	Kintak	Lanoh	Jahai	Mendriq	Bateq	Temiar	Semai	Semoq	Che Wong	Jahut	Mah Meri
Kedah	180	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Perak	30	227	359	740	0	0	8779	16299	0	4	0	0
Kelantan	14	8	0	309	131	247	5994	91	0	0	0	0
Terengganu	0	0	0	0	0	55	0	0	451	0	0	0
Pahang	0	0	0	0	14	658	116	9040	2037	381	3150	0
Selangor	0	0	0	0	0	0	227	619	0	12	38	2162
Negri Sembilan	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	5	12
Meleka	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
Johor	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	4
Sub-total	224	235	359	1049	145	960	15122	26049	2488	403	3193	2185
Total	2972						49440					

PROTO MELAYU ASLI						Sub-total
Temuan	Semelai	Jakun	Kanaq	Kuala	Seletar	
0	0	0	0	0	0	180
0	0	0	0	0	0	26438
0	0	0	0	0	0	6794
0	0	0	0	0	0	506
2741	2491	13113	0	0	0	33741
7107	135	157	0	10	5	10472
4691	1460	14	0	0	0	6188
818	6	0	0	0	0	831
663	11	3353	64	2482	796	7379
16020	4103	16637	64	2492	801	92529
40117						

（出所）JHEOA, 1993年調べ。
（注）都市部を除く山間地のオランアスリ村のみを対象。



第１図　オランアスリの分布（1991年）

Jabatan Perangkaan, Malaysia: *Profil Orang Asli di Semenanjung Malaysia: Siri monograf Banci Penduduk No.3,* 1997 (Deapartment of Statistics, Malaysia: *Profile of the Orang Asli in Peninsular Malaysia; Population Census Monograph Series No.3,*1997による。
（注）図中１ドットは100人を表している。

（第２表）。グループ別では，５万4000人の規模を有すセノイ系が最大の集団であり，全体の55％を占める。プロトマレーは４万2000人で42％，ネグリトはわずかに３％でしかない。セノイ系はペラ州（53％），パハン州などの中央山地部に多く分布し，「山の民」として知られてきた。プロトマレーは中央部から南部にかけて広くみられ，パハン州（45％），スランゴール州（14％），ジョホール州（17％），ヌグリスンビラン州（14％）に，そしてネグリトは，ペラ州（38％），クランタン州（28％）に分布している[5)]。ちなみに，第１表では連邦直轄領（KL）に関するデータは示されていないが，1991年センサスではオランアスリの居住が確認されている（第１図，１ドット＝100人ゆえ約300人在住か）。これは，JHEOAによる93年の調査がオランアスリ村を対象にしたものであることによる。いいかえれば，連邦直轄領内にはオランアスリ村は存在しないということを意味している。

第２表　クアラルンプル周辺地域のいくつかのオランアスリ集落

集落名 Kampung	集落所在地 地区／郡／州名	サブグループ名（グループ名）	備　　考
Sg.Bunbum	Pulau Carey／Kuala Langat／Selangor	Mah Meri (Senoi)	マラッカ海峡沿岸部油やし農園地域内に位置。村民の多くは、油やし農園の労働者・付近の工場労働者として就労。スランゴール州指定の観光村、木彫り工芸村。
Sg. Judah	Pulau Carey／Kuala Langat／Selangor	Mah Meri (Senoi)	マラッカ海峡沿岸部油やし農園地域内に位置。村民の多くは、油やし農園の労働者・付近の工場労働者として就労。
Bt. Kemandor	Pulau Carey／Kuala Langat／Selangor	Temuan (Proto-Malay)	マラッカ海峡沿岸部。村の周囲では広範囲にわたり工場団地造成中。村民の多くは、油やし農園労働者・付近の工場労働者として就労。
Sg. Lalang Baru	Semenyih ／ Hulu Langat／Selangor	Temuan (Proto-Malay)	自然保護林・山間レクレーション地。
Pasir Baru	Semenyih ／ Hulu Langat／Selangor	Temuan (Proto-Malay)	自然保護林・山間レクレーション地。
Batu Duabelas	Gombak ／Selangor	Temuan (Proto-Malay)	JHEOAパイロット村、オランアスリ博物館、オランアスリ病院、JHEOA職員住宅あり。村の背後を高速道路が走る。背後の山の頂に旧村Batu Kalaあり。
Desa Temuan (Bt. Lanjang)	Damansara ／ Petaling／Selangor	Temuan (Proto-Malay)	高速道路建設やニュータウン建設に伴う立退きにより，旧村のKg.Bt.Lanjangから2003年にBandar Damansara Perdanaというニュータウン内に集団移住。
Gerachi Jaya	Kuala Kubu Baru ／ Hulu Selangor／Selangor	Temuan (Proto-Malay)	ダム建設に伴い、現在地の新村に集団移住。若者の一部はダム建設会社に研修生として雇われる。
Peretak	Kuala Kubu Baru ／ Hulu Selangor／Selangor	Temuan (Proto-Malay)	ダム建設に伴い、現在地の新村に集団移住。若者の一部はダム建設会社に研修生として雇われる。
Hulu Pareh	Kara ／ Benton／ Pahang	Temuan (Proto-Malay)	Felda油やしプランテーション地域内に位置。若者はKLなど都市部で就労。
Haji Kubur	Kara ／ Benton／ Pahang	Temuan (Proto-Malay)	Felda油やしプランテーション地域内に位置。若者はKLなど都市部で就労。

注１）上記の集落は、筆者が2002年8月中旬～9月上旬，2003年8月中旬～2004年2月下旬，2004年8月中旬～9月上旬に訪問したオランアスリ集落である。

注２）Kg.＝Kampung（村），Bt.＝Bukit(丘)，Sg.＝Sungai(川)，JHEOA：「オランアスリ問題局」のマレーシア語略称。

２．オランアスリ保護政策とJHEOA

オランアスリのコミュニティは主に密林縁辺部か内陸地域に点在している。集落数は840を数える。主流社会の経済社会発展から取り残されてきたため，特別目標集団（special target group）として位置づけられ，JHEOAが主務機関として対応してきた（当初は首相府内，現在は農村開発省Rural Development Ministry内の部局)。JHEOAの前身である「原住民局」（The Department of Aborigines）

の創設は「原住民法」（The Aboriginal People Act 1954）が制定された年であるが，1961年に現在の機関名に変更されるとともに，彼らを「オランアスリ」と呼称することが定められた。

原住民局創設当時の半島マレーシアは，マラヤ共産党による反政府ゲリラ活動に対する非常事態（Emergency：1948～60年）下にあり，原住民局の基本的役割は，共産ゲリラが，内陸部に暮らす当時約２万人のオランアスリ社会に対して影響力を及ぼすのを回避させるねらいがあった。つまり，共産ゲリラに取り込まれないようオランアスリを説得して味方にすることにあった。

マラヤ共産党による反乱の終結に伴う非常事態の解除後は，オランアスリの主流社会への合流，社会的経済的地位の向上，（オランアスリ以外の）他のコミュニティとの統合，福祉政策が推進され，以下のような取り組みが行われてきた。①教育，②公衆衛生，③経済，④住宅および一般福祉，⑤治安，⑥インフラの整備・開発など。そして，密林地帯からその縁辺部，山地から平地への再定住計画が進められてきた[6)]。

３．周辺的コミュニティ・最下層としてのオランアスリ

オランアスリは，「ブミプトラ」として位置づけられていることにより，華人やインド系住民，パンジャブ人（シーク），タイ人，ビルマ人，ポルトガル人など，その他エスニックマイノリティに比べてマレー人と同様さまざまな特権を受ける地位にはある。また，オランアスリ保護政策により，主流・開発経済社会に早急に合流（統合）させるべき人々として対象化され，さらに貧困撲滅対象集団として，住宅や基礎的アメニティの供給など，さまざまな「支援」プログラムを受けてきた。しかし，過去30年間に，マレーシア経済の成長に伴い，国全体の貧困世帯比率が大幅に減少していくなかで，近年まで，実態として「密林の民」であったオランアスリは全体主流社会への参加が遅れていたため，経済社会的にマレーシアの中では依然として周辺的および最下層の地位に置かれてきた。

すなわち，マレーシア経済の急成長に伴い，同国の貧困世帯（半島マレーシアの場合，2002年現在，月収RM460以下の世帯）比率が1970年で49.3％であったのが，1987年 6.1％，そして2002年には5.1％へと着実に減少し，「新富裕層」や「新都市中間層」の膨張がみられた。しかし，尊厳に満ちた人間らしい生活を送るために必要最低限な貧困線所得以下の，とりわけその半分以下の月収しかない極貧層（the hardcore poor）の存在，「繁栄の中の貧困」が今日，大きな社会問題として注目されている。

極貧層として認定された世帯は，生活保護や極貧層向け特別住宅（Rumah PPRT）への入居がみとめられ，居住環境インフラ整備，奨学金の付与，職業訓練や所得獲得の機会の提供など，政府による福祉政策対象者となる。その基準額は，半島（西）マレーシアの場合，2000年現在，月収RM230（RM1＝約28円），サバ州RM272，サラワク州RM317となっている。そして同政府が貧困撲滅対象としているグループ（the poverty target groups）は，以下のような職業集団や階層，コミュニティに集中しているものとみなされており，オランアスリもそうしたグループの一つに指定されてきたのである[7)]。

零細ゴム農園主，稲作農民，サバ州の（焼畑）移動耕作民，サラワク州のサゴやし生産者，漁民，ココナッツ零細農園主，農園労働者，新村住民[8)]，農業労働者，オランアスリ，都市貧民[9)]

たとえば，2001年の新聞報道によれば，オランアスリコミュニティの貧困世帯比率は81％，さらに極貧世帯比率は46％にも及んでいるものと推定されている[10]。それ以前の1993年の首相府およびJHEOAの調査によれば，月収RM75未満の世帯比率が全国平均では9.5％だったが，オランアスリの場合，85％以上であった。マレーシアの農村社会では90％の世帯が，電気や水道の利用が可能だが，オランアスリの場合，電気はわずかに22％，水道は16.9％しか利用できない状態にあったという[11]。

オランアスリの生活水準の向上策は，JHEOAなどの政府機関を通じて，直接的には油やしやゴム，果樹，野菜の栽培の奨励，そのための土地の提供，また物的な生活環境の改善のために水道や電気など基礎的アメニティの整備のかたちをとって行われてきたが，それらの多くは，政府が進める開発プロジェクトに伴う立退き・再定住プログラムによるものであった。たとえば，写真１の新聞記事は，マラッカのあるオランアスリ住民の再定住について，以下のように伝えている。

「オランアスリ33家族が新居を取得」【*NST*: 16 August, 2004】

JASIN: オランアスリの33家族が，［…］カンポン＝ブキット＝ティガKg.Bukit Tigaの新居に転居した。新居は３室あり，電気や水道が敷設されている。これにより他のマレーシア人と同様に基本的アメニティの整った生活を享受できる。［…］彼らはトゥムアン族（tribe）に属し，ドゥリアン＝トゥンガルDurian Tenggal地区のカンポン＝チャパンKg.Gapamでこれまで電気や水のない生活を送ってきた。転居プログラムは，マラッカ・ヌグリスンビランJHEOAとマラッカ政府により推進された。新居住地は開発予定の前住地から40kmの距離にある。住民は，「これまで電気や水道を知らない生活を送ってきた。これからの健康的なライフスタイルを楽しみにしている」と語った。［…］ちなみに，マラッカ州には1300人のトゥムアン族に属するオランアスリが居住し，アロー＝ガジャAlor Gajahに７村落，ジャシンJasin地区に５つ以上の集落がある。

33 Orang Asli families get new homes

JASIN, Sun. — For 29-year-old Wira Bengek and 32 other Orang Asli families, moving into their new houses at Kampung Bukit Tiga, Gapam Baru near Simpang Bekoh, is a dream come true as they can now enjoy basic amenities like other Malaysians.

The 33 families — of the Temuan tribe — have been living without electricity and piped water at Kampung Gapam in Durian Tunggal district.

Today, they are brimming with joy as they were given keys to their new homes — three-room houses complete with electrical and piped water in Kampung Bukit Tiga.

Each family also gets a two-hectare land to plant rubber trees to supplement their income.

Their relocation was undertaken

BETTER FUTURE: Wira (right) and Aminah with their children and a relative at their new house in Kampung Bukit Tiga, Gapam Baru.

写真１　オランアスリの再定住を伝える新聞

【*NST*: 16 August, 2004】

このように，新聞報道を通じて，政府やJHEOAによるオランアスリに対する「手厚い」保護，生活水準の改善・貧困軽減政策が着実に進められていることが，しばしば巷間伝えられてきたが，彼らの経済社会的実態は全体として劣悪な状況にある。オランアスリの経済社会的状況をめぐる問題については，これまでに多くの研究報告がなされているが，ここではマレーシア政府統計局による『1991年人口・住宅センサス』にもとづいたオランアスリに関する調査レポート『半島マレーシアにおけるオランアスリの概要』[12] を参照しながら，粗描することにする。

Ⅲ．1991年センサスからみたオランアスリ

１．経済･就労活動

オランアスリは伝統的に密林，その縁辺部および海岸部で生活し，狩猟，焼畑，森の産物の採取，漁労を行ってきた。こうした活動は今もおこなわれているが，経済生活は大きく変わるようになった。農業局（Agriculture Department）や連邦土地合同・復興公社（FELCRA：Federal Land Consolidation and Rehabilitation Authority）などの政府機関との共同により，JHEOAの指導下で行われた再定住計画に伴い，主流社会の経済社会に次第に組み込まれるようになったからである。彼らの主たる雇用部門は農業，畜産，林業であるが，もっとも就業率が高いのは農業であり，ゴムや油やしのプランテーション，花卉や野菜の生産での就労に関わっている。

しかし，1980年には農業部門従事者が85％だったが，91年には80％に減少し，徐々に，若年層を中心に，他の分野への職業移動がみられるようになった。生産部門は６％から８％に，教員や医療アシスタントなどの専門職・技術職の分野で0.6％から1.4％に増加した。生産分野では建設労働者，木材関連労働者，機械整備士，工場労働者，公務員・サービス分野では，男性の場合，警官や森林管理員，女性はメイドや店員，レストラン・ホテル従業員に就く者が増えつつある[13]。

２．教　育

オランアスリ全体の就学状況についてみた場合，38％が初等学校を修了し，８％ が低中等教育（３年間：中学校相当），３％未満が高中等教育（低中等教育後の２年間：高校相当）しか修了していない。15～19歳の修了率は52％であり，44歳までの年齢層では未就学者は減少してきているが，45歳以上の未就学者率は高い。オランアスリの全体の就学状況は改善されたが，初等教育における中途退学者が多い。また高中等学校への進学率はきわめて低い。高中等学校への通学率は低い。親の教育に対する不理解とともに，子供たちを居住地から遠隔地の学校（寄宿舎ずまい）に通わせることが，就学の継続性を損なわせる原因となっている。

男女とも1980年に比べて就学率は増加しているが，初等学校の就学率では男性が42％に対して，女性がわずかに34％と，女性の未就学者率が高い。なお，オランアスリの大半が居住している農山村部では，約92％が未就学者か初等教育修了者である。こうした教育状況が，現在のオランアスリの経済社会的地位の低さを規定しており，この点が，今後の最重要課題の一つとなっている[14]。

３．宗　教

オランアスリは伝統的にアニミストである。しかし，ほかのエスニックコミュニティとの相互交

流により，イスラーム教やキリスト教に帰依する者もいる。「無宗教」の割合が多いものの，実際には伝統的な文化や信仰に関連した民俗宗教（folk religion）を実践している。これを含めると1991年センサスでは，71％が民俗宗教を信仰している。次いでイスラーム教であり，80年の５％に比べると11％に増加している。５％がキリスト教徒である[15]。

４．住宅・アメニティ

オランアスリの伝統的な住居は，竹やニッパやしを素材としたものであり（写真２），現在も内陸農村部で多く見られるが，JHEOAの指導により，板を使用した高床式の改良住宅が普及しつつある。最近では，耐用年数の長いブロック・コンクリート建ての住宅もみられるようになった（後掲写真６）。

電気や水道などの基本的アメニティは，再定住村などを中心に次第に整備されつつある。たとえば，オランアスリ世帯全体の46％が水道を利用している（都市部のオランアスリはほとんどが水道による）。しかし，30％が昔ながらに川を飲料水源とし，24％は井戸から取水している。照明は，57％がランプ，36％が電気による。内陸の農村部ではJHEOAによって提供された，あるいは個人の購入による発電機を利用している。トイレについては，半島マレーシア全世帯でトイレをもたない住居が３％であるのに対して，オランアスリの場合，47％に及んでいる。しかし45％の世帯が水洗トイレをできるようになっている[16]。

写真２　Kg. Bt. Duabelasの伝統的オランアスリ住居

（2002年８月31日撮影）

オランアスリの経済社会的状況に関する以上の概要は，オランアスリ社会全体についてみたものであるが，1991年センサス時には，人口1000人以上の町や１万人以上の都市に暮らすオランアスリの割合はそれぞれ２％，９％でしかなかったことから[17]，以上の状況は，事実上，山間地など非都市的地域に暮らすオランアスリ社会に関するものと理解できる。したがって，都市地域やその隣接地域に暮らすオランアスリの生活実態そのものについては，十分明らかにされてはいない。さらに，90年代を通じて開発プロジェクトが各地で展開したことにより，オランアスリ社会は開発の波に翻弄されたわけであるが，とりわけ都市周辺地域のオランアスリコミュニティは再定住を伴うなど，激変にさらされることになり，彼らの経済社会的状況はこの間に大きく変貌を遂げたことであろう（現段階では2000年センサスにもとづくオランアスリ社会に関する詳細な公式データは未入手）。

オランアスリの生活領域が開発プロジェクトに取り込まれ，あるいは若者層を中心に都市地域への移住により，就業機会・所得・教育・生活環境などの側面における「改善」「向上」が期待できるかもしれない。しかし，このことは，オランアスリがマレーシア社会のほかのコミュニティとの

接触の度合いが高まること，あるいは近代化された全体社会への適応を求められるようになることなど，生活環境の変化に伴い，彼らが直面せざるをえない新たな問題に留意しなければならないことを意味している。

Ⅳ．KL 周辺地域のオランアスリ社会

１．都市化するオランアスリ社会

政府によるオランアスリの全体主流社会への統合政策や開発政策の地理的拡大に伴い，オランアスリは次第に「密林の民」ではなくなりつつある。たとえば，1980年代以降，油やしのプランテーション開発の只中に旧集落が取り込まれたことにより，集落が改良されるとともに，住民がプランテーション労働に参加するようになった。また，ダム建設，ゴルフコース・リゾート開発，ニュータウン・高速道路の建設が進められている大都市周辺地域では立退きを余儀なくされ，政府やデベロッパーにより無償提供された新村やニュータウンの中の一画に集団移住するオランアスリコミュニティが出現した。そして，高速道路など幹線道路の発達，比較的入手容易なオートバイの普及，工場団地やニュータウンの郊外化は，これまで都市労働市場へのアクセスが困難であったオランアスリ社会の就労状況を「都市化」させることになったのである。

模式的に表現するならば，今日のオランアスリコミュニティは，以下のような３つの状況あるいは段階のいずれかにある（言い換えれば，オランアスリコミュニティは，①→②→③への段階的移行を経験してきた。もちろん，①→③というケースがあったことは想像に難くない）。

①伝統的生活領域での暮らしを継続しつつも，政府・JHEOAによって主流社会への統合（合流）途上段階にある状況

②伝統的生活領域の中で前住地の改良プログラムあるいは新村への再定住プログラムに組み込まれた状況

③開発プロジェクトにより伝統的生活領域がほとんど損なわれ，主流社会の只中に取り込まれた状況

KL 周辺地域におけるオランアスリ社会は，もはや①の状況にはない。その多くは，すでに政府による主流社会への統合計画に組み込まれ，さらに，さまざまな開発プロジェクトの進展やKL大都市地域の拡大により，②もしくは③の状況下に置かれていると言えよう。

たとえば，マラッカ海峡沿岸低地部のスランゴール州クアラ＝ランガットKuala Langat郡プラウ＝キャリーPulau Carey地区は，広大な密林地帯から油やしやゴムのプランテーション地域へと変貌をとげてきた。同地域やフル＝ランガットHulu Langat郡の山間地域では，外国人観光客や新都市中間層の集客を意識したリゾート開発，フル＝スランゴールHulu Selangor郡のスランゴール川上流では都市の経済活動や住民向けの給水事業のためのダム建設が行われた。他方，KL大都市地域各地において，ニュータウンや高速道路の建設，KL南郊のプタリン郡やセパンSepang郡においては，KL新国際空港（KLIA）・新行政首都プトラジャヤPutra Jaya・電子科学研究都市サイバージャヤCyber Jayaを中核とするマルチメディア＝スーパー＝コリドー（Multimedia Super Corridor: MSC）の建設という国家的メガプロジェクトが進行中である。こうした開発プロジェクトによって，オランアスリの人々の伝統的生活領域が侵害されたり，祖先代々受け継いできた土地か

らの立退きと新村への再定住を余儀なくされたりもした[18]。さらに，男女を問わず若年層を中心に都市部の労働力市場に参入する人々が増えはじめている。こうして，「開発プロジェクトに翻弄される」あるいは「都市化する」オランアスリというオルタナティブな視点からのアプローチが求められようとしているのである。

２．KL周辺地域のオランアスリコミュニティ

KL周辺地域の個々のオランアスリ村（*Kampung Orang Asli*）に関するグループ名・人口･世帯数などの概要や所在地については，JHEOAが秘匿しているため，それらの詳細は不明であるが，オランアスリ保留地の登記状況に関するスランゴール州政府のコメントを報じた1999年５月の新聞報道によれば，同州には総面積7854haのオランアスリ保留地（Orang Asli Reserve Land）に73集落が位置し，１万131人のオランアスリが居住しているという[19]。また，グループ別にみると，プロトマレー系が7414人（スランゴール州在住のオランアスリ全体の70.8％），セノイ系が3058人（29.2％）となっている。サブグループ別では，プロトマレー系のトゥムアンTemuan人が最大集団で7107人（67.9％），次いでセノイ系マフムリMah Meri人が2162人（20.6％）となっている（1993年JHEOA調べ：第１表）。

オランアスリのおおよその分布状況は第１図にみるとおりであるが，スランゴール州政府は，アクセス良好ないくつかのオランアスリ村を観光スポットとして位置づけ，市販の地図でも「オランアスリ村」として表記されているケースがあるので，それらの村を訪れることは比較的容易である。また，新聞報道もオランアスリ村の所在地を知るための貴重な情報源となる。

第２表は，2002年８月中旬～９月上旬，2003年８月中旬～2004年２月下旬，2004年８月中旬～９月上旬に，筆者がKL周辺地域において訪問したオランアスリ村の事例を示している。以下に紹介するオランアスリ村に関する粗描は，そうした断続的な訪問の際に得られた知見や新聞記事などにもとづいている。以下，主な訪問地について紹介してみる。

（１）カンポン＝スンガイ＝ブンブン：油やしプランテーション地域の「工芸村」

カンポン＝スンガイ＝ブンブンKampung Sungai Bumbun（*Kampung*＝村，以下Kg.：*Sungai*＝川，以下：Sg.）はマフムリ人（セノイ系）の村であり，KLの南西，マラッカ海峡沿岸の低地部のスランゴール州クアラ＝ランッガット郡プラウ＝キャリー地区に位置する。スンガイ＝ブンブンは，Golden Hope社の広大な油ヤシ農園の中をまっすぐに貫く２車線の幹線道路から横道に入った農園の真っ只中に位置する。地図上でオランアスリ村と表記されていないかぎり，そして村の入り口に村名とマレー語とオランアスリの言葉で「歓迎」と記された標識が立てられていなければ，そこにスンガイ＝ブンブン村が存在していることは，誰にも気づかれることはないだろう。

油ヤシや果樹などの背の高い樹木の中を車で入っていくと，村の中をまっすぐに伸びる舗装道路にそって高床式の木造家屋が樹木のまにまにみえてくる。竹などで編んだ屋根や壁の高床式の伝統的な家屋も残っている。村の中の１本道を奥に入っていくと丁字路となっており，さらにその奥に進むと油ヤシ農園が広がっている。

キャリー島（*pulau*＝島）には，同村のほかにスンガイ＝ジュダ村Kg. Sg. Judahなど４村，計５つのオランアスリ村が位置している。少なくとも1920年代以来，現在地においてオランアスリの暮らしがあったと言われているが，マングローブが生い茂っていたキャリー島の開発，とりわけ

Golden Hope社による油やし農園の開業以降，また，観光開発構想が浮上しはじめた90年代終わり頃，スンガイ＝ブンブン村はクパー＝ラウト村Kg. Kepah Lautとともに，オランアスリ集落としての土地登記が未了であったため（つまり「不法占拠している」との理由から），両村あわせて約100家族がGolden Hope社所有地からの立退きを求められたことがある[20]。

マレーシアにおいて，近代的土地法･登記制度が本格的に導入される以前から生活世界をすでに構築してきた先着・先住民による州有地や州政府によって払い下げられた社有地での「不法占拠」（*tana haram*）問題が，1980年代以降，とりわけ各種開発プロジェクトが展開をみるようになった90年代に全国各地で表面化した。開発の舞台は都市部だけでなく，辺境の地やこれまで密林がひろがっていたオランアスリの生活領域，主流社会から「忘れられてきた」人々の生活空間にまで拡大するようになったからである[21]。スンガイ＝ブンブン村もそうした事例にほかならない。

村の入り口付近には，こぢんまりとした初等学校（スンガイ＝ブンブン国民初等学校Sekolah Rendah Kebangsaan Sungai Bumbun）が位置する。この村を訪問したとき，ちょうど午前の部の下校時間（午後１時過ぎ）にあたり，児童が校門から三々五々でてきた（写真３）。薄暗かった村の中もにわかに白色と青色の制服でにぎやかになる。児童の制服は，教科書や文具，通学用の靴とともに，JHEOAからの支給によるものである。

写真３　油やし農園内のオランアスリ村Kg.Bunbum

下校中の小学生たち（2003年８月17日撮影）

オランアスリコミュニティに関わっては，政府とオランアスリとの間の土地や密林資源の占有権をめぐる対立，貧困問題のほかに，子どもたちの教育をめぐる問題がとりざたされてきたが，この村の場合はどうか。2002年２月14日付けの*NST*紙[22]に，当時の同初等学校長が語った内容が記事となっている。以下は，その要旨である。

スンガイ＝ブンブン国民初等学校には，同村のほかに遠くはJHEOAのスクールバスで40分も要するところに位置する村を含め，計４つのオランアスリ村から，131名の児童が通ってきている。過去に卒業生の中からマレーシア農業大学（UPM），マレーシア工科大学（UTM）で学位を取った者が３人いるが，ほかのオランアスリコミュニティの初等学校と同様，児童の学習能力の低さや中退の問題をかかえている。全国一斉に行う学力試験で及第点を取った者は過去３年平均で16.7％でしかない。昨年の試験で，英語で合格したのは誰一人いなかった。オランアスリの子供にとって，マレーシア語の知識が十分ではないため入学後，学習能力は向上しない。加えて英語が最大の落伍要因となっている。学校で学んでも家で学習するという継続性に

欠ける児童が80％もいる。この初等学校でも多くの児童が中退するが，９歳か10歳で中退する者がほとんどである。学習意欲の低下に加え，幼い兄弟姉妹の世話，家計収入を補うために，油やし農園での臨時雇いや蟹をとったりするようになるからだ。初等学校を卒業しても，中等学校に進学するのは40％程度でしかない。オランアスリの置かれている生活環境の改善と両親の子供の教育に対する理解が大事なのだ。

スンガイ＝ブンブン初等学校での中退率がどの程度かは不明である。しかし，オランアスリ社会全体についてみた場合（JHEOAの調べ），1971～95年の間に，毎年平均で62.1％が，また1995年入学した5505人の初等学生のうち42.9％が2000年の卒業までに中退した，という[23]。またオランアスリの人権問題に長年取り組んできたニコラス（Nicholas, C.）によれば，1996～2000年の初等学校中退率は54.5％だったという[24]。マレーシア政府は，移民集団の末裔に対する競争力をつけるため，教育を含めてさまざまな分野でのブミプトラ優先政策を徹底して推し進めてきたが，結局それは「マレー人優先政策」にとどまっており，同じくブミプトラというカテゴリーに組み入れながらも，先着・先住民族であるはずのオランアスリは優先されるのではなく，JHEOAを通じて名目「保護される」，しかし実態として放置され，「開発の必要に応じて対象化される存在」でしかなかったということなのであろう。

村民の主な生業は，村内や周辺での零細農・漁業・臨時雇いである。近年，若い男性は，バイクで幹線道路沿いのNECやTOSHIBAの工場などに通勤したり，女性の場合，レストランやホテルに勤務したりする者が増えてきているという（聞き取りをした22歳の女性は中等学校を卒業後，ホテルのハウスキーピングをしている）。このほかに伝統工芸（木彫り）の制作によって現金収入を得ている者もいる（写真４）。この村は，マスメディアでもしばしばとりあげられてきた著名な「オランアスリ工芸村」である。ゴンバック郡のトゥムアン人の村，ドゥアブラス村Kg. Duabelasにあるオランアスリ・ミュージアムに展示されている木彫り作品の多くは，この村の木彫り師たちによるものである。面や像のモチーフは，マフムリの人々の伝承譚の中に出てくるマタハリ（トラ）などの動物や精霊などをモチーフにした作品が多く，一体RM300～1000で売られる。木彫り師たちが直面している問題は，周辺の開発により木彫り用の原木が絶滅の危機に瀕していることだという[25]。

写真４　Kg.Bunbumの木彫り工芸師

（2003年８月17日撮影）

スンガイ＝ブンブン村は，スランゴール州政府によってオランアスリコミュニティ振興策として，「オランアスリ工芸村」と銘打って推

奨，宣伝されてはいるが，観光客がひんぱんに訪れてくるわけではない。実際，村の中には集客施設は全くみあたらない。村民自体，ツーリズムに結びついた「村おこし」あるいは「貧困克服のためのツーリズム」[26] には関心を抱いていない，あるいは政府の性急な振興策にとまどいを覚えているということであろうか。

（2）カンポン＝グラチ＝ジャヤ：ダム建設に伴う再定住村

カンポン＝グラチ＝ジャヤKg.Gerachi Jayaは，スランゴール州北部フル＝スランゴールHulu Selangor郡クアラ＝クブ＝バルKuala Kubu Baru地区内のトゥムアン人（プロト＝マレー系）の村である。KLから北西に高速自動車道を約１時間，地区中心の町クアラ＝クブ＝バルを経て，英領マラヤ時代に切り拓かれた高原避暑地のフレーザーズ＝ヒルFrazaer's Hillに向かう舗装道路がスンガイ＝スランゴール＝ダムSg. Selangor Damに至る手前の山腹に位置する（写真５）。ダムの上流側の平地には，同じくオランアスリ村のカンポン＝プルタックKg. Pertakが位置している。いずれもスランゴール川のダムサイト建設に伴う再定住村である。

両村の再定住計画は，1999年９月スランゴール州政府によって公表され，州政府／デベロッパー／JHEOAと住民との間で協議を経た後，JHEOAの指導の下，おおよそ次のような内容から成るものであった。両村あわせて約340人（グラチ村75家族，プルタック村38家族）が，川沿いにあった元村からそれぞれ１，２km離れた現在地に移り住む。再定住に際しては，各家族に対し，最初の３年間，毎月RM250の給付，電気や水道水などのアメニティが完備した新居，転住後，現金収入を得るために２haの農地（油やし，ゴム，果樹の栽培地）が提供される[27]。

写真５　Kg. Gerachi Jaya
ダム建設に伴い再定住したオランアスリ新村（2004年２月５日撮影）

筆者がこの両村を訪問した2004年２月５日の２日前，*Star*紙は二面を割いて再定住計画が完了した新村の近況を以下のように紹介している[28]。

グラチ村とプルタック村はオランアスリの村である。最近，現在地に再定住してくるまで，村民はよりよき近代的な生活環境を求めることができなかった。［…］クアラ＝スランゴールKuala Selangor（藤巻注：スランゴール川下流のマラッカ海峡沿岸の町）における給水事業計画のためのダム建設に伴う立ち退きで，グラチ村の41家族と，プルタック村の43家族が現在地に再定住した[29]。

二つの新村の住居は，３寝室から成る。村長（*Tok Batin*）[30] には４寝室の住居が与えられて

いる。新村には水，電気，アスファルトの舗装道路などのインフラ，コミュニティセンター，コミュニティホール，診療所，雑貨屋，イスラーム教礼拝所（*surau*），サッカー場も備えられている。

スランゴール川ダムの建設当初，二村の住民は，村がダムの底に沈み，先祖から受け継いできた土地が押し流されてしまうのではないかとの不安から，記者会見の場で共同声明を発表するなど反発の姿勢を示したが，その後の協議により，現在地への再定住計画を受けいれた。

住民は静かで平和な暮らしを得，近代的な暮らしの快適さを満喫している。［…］新村に移り住む以前に，建設会社が住民に対して，近代的な住居施設，施設の使い方，衛生に関する基本的知識を身につけてもらうための一連のプログラムを提供。［…］また，年間RM6000（５人分）の大学進学者に対する奨学金が給付されることになった。

若者たちが，給水事業計画の建設現場で建設会社によって雇われている。２つの村から24人の住民が，スランゴール州都のシャー＝アラムにある職業訓練学校で，２ヵ月間の掘削技術者としての研修と３ヵ月間の実務研修を受けている。ダム建設会社は，研修生に日当の支給と週末の村への帰省を認めている。研修生の月収はRM600～1200である。研修は，オランアスリの生活水準改善を支援することを目的としている。若者は，ダムの建設以前には何もすることがなかったが，この研修プログラムにより新たな雇用機会を得ることができるようになった。

オランアスリのコミュニティは，ドリアンなどの果物のようなジャングルの産物を主な収入源にしている。またスランゴール川やジャングルのガイドで収入を補うこともできる。ダム建設が始まるまで，この地域は，透き通った川のすばらしさでよく知られていたが，今もなおKLなどの都会からの行楽客に自然のすばらしを提供している。

このように*Star*紙では，再定住計画が大いに礼賛されているが，住民の肉声が十分に伝わってこない。そこで村長宅を訪ねたが，あいにく不在であったので，近くの新築住宅の玄関口のベランダでチェスをしていた住民男性４人に暮らし向きについて尋ねてみる。午前中，裏山で竹を伐採してきたばかりで，今，休憩中だという。自分たちの村について書かれた２，３日前発行の新聞記事のことは知らないというので，その英字新聞をみせたところ，英語はわからないという。そこで，同行のマレー人に記事の概略をマレー語で通訳してもらう。彼らの反応は，かんばしくない。「多分，村長が取材に応じたのだろう。新しい家に移り住んだことで生活は便利にはなったが，個々人の暮らし向きは，いきなり変わるわけではない。これからもそうだろう」という。つまり，新居を提供され，確かに物的な生活環境は以前より向上した。果樹の栽培が順調に行けば幾ばくかの現金収入が得られるかもしれないが，それは不確かなことである。若者向けの研修・雇用機会の提供がなされ，大学進学者への奨学金制度も設けられたかもしれないが，村民それぞれの今後の暮らしに対する配慮がとられているわけではないことを示唆している。

（３）デサ＝トゥムアン：密林の民からニュータウンの民へ

デサ＝トゥムアンDesa Temuanは，その名のとおり「トゥムアン人の村（*Desa*）」である。同村は，現在，スランゴール州プタリン郡ダマンサーラDamansara地区内バンダル＝ダマンサーラ＝プルダナBandar Damansara Perdanaというニュータウン内の一角にある。2003年に，同ニュータウン近くの旧村ブキット＝ランジャンKg.Bt.Lanjangからの移住村である（写真６）。

ダマンサーラ地区は，KL西郊外の，かつてはゴムや油やしの農園と密林が広がる地域であり，1980年代から高速道路，数多くのニュータウンや工場団地が建設されてきた一大開発地域である。その只中にブキット＝ランジャン村が位置していた。しかし，オランアスリ保留地（256.4 ha）における立体交差の高速道路やニュータウンの建設のため，1995年，再定住プログラムが開始された。

写真６　Desa Temuanのアパート

（2003年８月17日撮影）

旧村が高速道路の建設予定地となったため，ブキット＝ランジャンのオランアスリ住民は近傍のニュータウン内に集団移住することになった。

このプロジェクトは，当時の第４代首相マハティールの発案によるもので，当初，147の全家族に一戸建て平屋が2001年11月に手渡されるというものであった。1997／98年のアジア通貨危機の影響でプロジェクトが遅延し，新居が完成するまでの間，住民はデベロッパーが提供した木造長屋に仮住まいせざるをなかった。147家族のうち，すでに17家族に対しては，近隣の開発地域であるスンガイ＝ブローSungai Bulohに建設済みの二階建てのテラスハウスとコミュニティホールが譲渡されている。残りの130家族は，2003年９月にようやくニュータウンの中に区画された新村（デサ＝トゥムアン）に集団移住できるに至った。

保留地からの立退きに際し，各家族に対して月額RM500の補助金が支払われたほか，移転費用にRM300，さらに住宅購入費としてRM45,000が支給された。また，コミュニティに対しては，JHEOAを通じてRM700万の教育基金や次世代のための用地も準備されている。各住居は３室・トイレ・浴室から成り，学校・児童の遊び場・多目的ホールなどの共用施設も設けられている。州政府は，住宅プロジェクトという物的目標は無事終了したが，社会的目標は実現されているわけではない。コミュニティの改善プログラムのために，JHEOAや農村開発省，国民統合社会開発省（National Unity and Social Development Ministry）などの関係機関とともに，支援事業を継続していく予定であるという[31]。

マレーシアでは，土地空間は州有地であり，土地取得申請者に対して申請の可否について審査の後，最長99年の賃借権（leasehold）が各州政府から認可，譲渡されるかたちをとる。伝統的テリトリーである旨，オランアスリが主張しても，先着住民であるにもかかわらず政治的影響力をもたない絶対的少数者であるため，近代的土地制度を盾に，ささやかな補償と引き換えに彼らの土地は切り取られ，開発用地に転用されてきた。ブキット＝ランジャンの場合，オランアスリ保留地という「聖域」ですら，開発の波にのみこまれてしまった事例といえよう。

ところで1999年総選挙前，マハティール前首相は，再定住計画が進められていたブキット＝ラン

ジャン村においてオランアスリ大集会を開催し，半島マレーシア全域から約600人の村長（バティン）を三つ星ホテル無料宿泊・長袖シャツ・革靴・RM50の手当て付きで招待している。同首相は，村長たちを前に，同村の再定住計画を事例として，政府のオランアスリに対する取り組みがいかにオランアスリの暮らしを豊かにしてきたかを強調し，総選挙時における与党連合（国民戦線：Barisan Nasional）への支持を求める演説を行ったという[32]。これに対して，ニコラスNicolas, C.[33]は，マハティールはブキット＝ランジャン村の再定住計画において，住民に対してRM6100万（17億円）の補償プログラムが準備されていることから，あたかも住民は大金持ちになるかのように述べているが，それらが具体的にどのように配分されるかについて何も明らかにされなかった。しかも開発プロジェクトの総コストはRM124億（3472億円）であるのに対して，オランアスリ保留地の収用に対する補償費は全体のわずか0.5％にしか過ぎなかったと，マハティールを痛烈に批判している。ちなみにニコラスによれば，ブキット＝ランジャンでの集会でのマハティールの演説は，総選挙のキャンペーン期間中にTVのドキュメンタリーで何度も放映されたという。

Ⅴ.「見えざる」オランアスリ，搾取される密林？

> 1998年６月29日のKLIA（クアラルンプル国際空港）開港式典でのマハティールの演説はTV実況されたが，それは間の抜けたものであった。「なぜ，私たちが，ここセパンを空港建設用地としたか。その理由は［…］ここが無人の地だったからです」と述べたからにほかならない。賢明なことに新聞各紙はこの部分は引用しなかった。［…］実際には，空港の第１滑走路には，［…］オランアスリの家族が暮らしていたからである。彼らは，マハティールの「*Malaysia Boleh*」＜Malaysia Can＞ビジョンの新しいシンボル＜KLIA＞のために，低湿地を埋立てた場所に再定住させられねばならなかったのだ。［…］彼らが立退いてから６年経過した今日，再定住以前よりも彼らの暮らしは悪化した。再定住地の土壌が劣悪であり，各家族に対して５本の油やしを与えるという約束がまだはたされていないからである。傷口に塩をすり込むかのように，空港近傍のオランアスリコミュニティの代表たちがマレーシア航空のジェット機に無料で搭乗する機会が与えられたとき，一人のオランアスリは搭乗しなかった。［…］マハティールのオープンセレモニーの際のスピーチにみるように，オランアスリは見えざる存在なのである。（下線および＜　＞内，藤巻による）

ニコラスの論考「マハティールの見えざるマイノリティ：オランアスリ」[34]からの以上の引用文は，1981年から2003年に退陣するまでの20年余り，マハティールの視野には，オランアスリの存在が刻印されていなかったどころか，彼らに対してマハティールが，いかに全くといっていいほど無知ですらあったかを如実に物語っている。KLIAは，「マハティールの国」づくりの一環として，彼の政治生命を傾注したMSCメガプロジェクトの一大拠点にほかならない。しかし，マハティールは，KLIAを含むMSCという企図空間（「空間の表象」[35]）にオランアスリの生活空間の広がりのあることに気づいていなかった。オランアスリの伝統的生活領域は，彼には「見えざる（invisible）空間」であり，空港建設用地は広大なゴムや油やしのプランテーション，そして密林が広がる文字通りの「空間」でしかなかったということであろう[36]。であるがゆえにニコラスは，マハティール

のパーセプションにおいて，オランアスリは「見えざるマイノリティ」（invisible minority）でしかなかったのであると，彼をきびしく指弾したのである。

実際，マハティールにとって，マレーシアは，マレー人（あるいはブミプトラ）・華人・インド系の「三大種族」から成る多民族国家であっても，「その他ブミプトラ」，絶対的少数者であるオランアスリは，「その他」エスニックマイノリティ同様，政治社会的勢力としては取るに足らない断片的，周辺的コミュニティ（marginalized community）でしかなかったのであろう。しかし，選挙のシーズンが到来すると，彼は，マハティール政権がいかにオランアスリ社会の発展に貢献してきたかを喧伝し，オランアスリ票が勝敗の鍵を握る選挙区ではオランアスリの窮状に耳を傾ける身振り・素振りをし，ささやかな支給物やリップサービスの見返りにオランアスリの支持を求めるという，ご都合主義的打算的対応をしてきたのも事実なのである[37]。マハティールにとって「見えざるマイノリティ」としてのオランアスリも，必要に応じて可視的存在になるということであろう。

マレー人以前に先着した文字通りの「最初のマレーシア人」[38]であるオランアスリにとって，先祖伝来の生命・生活空間であった密林という土地空間は，これまで（良質のドリアンやプタイ＜*petai*：苦味のある長枝豆＞が密林からの恵みものであることは知っていても），主流社会の人々にとって近づくべきではない「瘴癘（しょうれい）の地」もしくは密林の広がる「空虚な空間」でしかなく，その地の住民たちは「忘れられた人々」・「見えざる人々」，可視的であっても「未開な人々」でしかなかった。しかし，開発の時代を迎え，国家･資本が土地空間を含めて資源的価値を見出すことにより，密林は瘴癘の地，空虚な空間ではなくなった。そして土地の収奪，オランアスリ・コミュニティの開発用地からの再定住（追立て）政策が推進されるようになった。

政府は，オランアスリには保留地が確保されている，土地収用・再定住に際しては社会経済的補償・保護がJHEOAを通じて適切にほどこされてきたと主張する。その一方で，マレーシアの土地は原則として州有地であり，登記申請が州政府になされていないかぎり，そこに居住，そこを使用している者は，何人たりといえども州有地の「不法占拠者」（*orang setinggan*）であり，オランアスリも例外ではないとする姿勢を貫いてきたのである[39]。

他方，オランアスリ自身の側は，こうした政府の姿勢に対してどのように主体的であったのだろうか。これまでは，権威主義的強権政治のもと，「政府／JHEOA／UMNO[40]／選挙区指導者（下院議員）ーバティンーオランアスリ民衆」という擬制的パトロンークライアント＝システムにからめとられ，飼い馴らされてきた「小さき民（*orang kecil*）」であることに甘んじてきたと言えるかもしれない。確かにオランアスリの窮状・不満・要求は，オランアスリ関連センター（Centrer for Orang Asli Concerns），ペナン消費者協会（Consumers' Association of Penang），マレーシア人権委員会（Suhakam: The Malaysian Human Rights Commission）[41]など外部のNGO，社団法人やマスメディアを通じて市井に伝えられ，政府のオランアスリコミュニティに対する姿勢が批判されることがあっても，オランアスリ自らが主体的に，政府に対して対抗していくという生存戦略の打ち出しという試みは稀有なことであった。いいかえれば，オランアスリコミュニティは，これまでオランアスリ保留地や彼らが伝統的に生活領域としてきた「生きられる空間」（「表象の空間」）[42]を「抵抗の空間」とすることなく，開発政治至上主義的主流経済社会に組み込まれることを余儀なくされてきた。

しかし，近年，オランアスリ固有の土地（生命・生活空間）の保有権・利用権に関わって，オランアスリ自らが，政府の施策に対して訴訟をおこすなど，異議申し立て運動を展開するようになって

きている。たとえば，バネルとナーBunnell, T. and Nah, A.M.[43]が紹介しているブキット＝タンポイ村Kg. Bukit Tampoiの訴訟が好例であろう。同村は，ニコルスが触れた上記のケース（カンポン＝ブスットKg.Busut）とは別の，しかし同じくセパンにおけるKLIA建設に関わって土地接収を余儀なくされたトゥムアン人の村である。スランゴール州政府は，空港へのアクセス道路建設用地として彼らの生活領域を接収するにあたり，村民の住居などの建造物・作物･果樹など道路建設に伴って破壊されるものは補償対象にするが，土地に対しては州有地（スルタンの土地）であるとの理由から補償対象から除外しようとした。これに対して住民側は，この村は彼らの記憶によっても定かでないほど遠い昔から現在地にあり，何世代にもわたって，その地に固有の生活空間を築き上げてきたこと，そして開発予定地は，慣習法にもとづき先祖代々，専有・継承してきた彼らの土地であることを理由に裁判所に提訴した。その結果，2002年に問題の土地に対する村民の権利が認知され，州政府は村民に対して市場価格にもとづく補償金を支払うべき旨の判決を獲得している。「彼らの土地」であるとの裁定が得られた根拠は，土地に関わる慣習法が現在にまで継承され，伝統的な部族会議を通じて土地が村民の間で適正に配分，利用されてきたという生活実践，いいかえれば審議の過程で紐解かれた彼らの「ジオヒストリー」（geo-history：土地の履歴）そのものに求められた，という。また，記録された土地占有権が存在せずともJHEOAが同村の存在を認知・同意していたこと，さらに法律に照らし合わせてみても，州・連邦政府は原住民法および連邦憲法によりオランアスリとしての同村の住民の権利を守るべき信託義務を怠っていたことも証明された。つまり，土地の占有に関わる政府とオランアスリとの間の，記録（登記）された物理的土地空間と記憶・実践されてきた生きられた空間をめぐるせめぎあいは，結果として倫理的にも法律的にも後者の優位が認められた，ということである。

また，約４万5000人のオランアスリが暮らしているペラ州では2003年に，土地や教育，電気・飲料水・道路といったインフラへのアクセスに関わる要求を実現していくために，25のセマイ系オランアスリ村（約9000人）が，一つのネットワークを構築したという。そして，ペラ州政府が，果樹・野菜栽培会社にリースすることになっていた土地の開発は，地元のオランアスリコミュニティが伝統的に果物・竹・木材など密林の産物を採集してきた空間のみならず，採水場をも破壊するものであるとして，開墾事業の差し止めを要求し，事業を延期させたという事例が伝えられている[44]。

現在，密林は稀少草木資源の宝庫であるとして，グローバルなバイオテクノロジー・医薬資本から注目されるようになりつつある[45]。このことは，「最初のマレーシア人」であるにもかかわらず「最後のマレーシア人」として周辺的地位・状況に追いやられてきたオランアスリの生命・生活空間が，ますます国家・資本による新たな収奪の対象，新たな「せめぎあいの空間」（the contested space）になろうとしていることを意味している。もしも，マレーシア政府が，さまざまな背景をもつ国民に対して単一の国民／民族意識にもとづく「マレーシア人」（*Bangsa Malaysia*）の創造への参加を求めた「*Wawasan* 2020」（Vision 2020）の実現を望むのであれば，そして「原住民法」が目的とするオランアスリの真の発展を期待するのならば，彼らの固有の慣習や文化とともに，彼らの「空間」あるいは「場所」を倫理的にも法律的にも適正に認知していく姿勢をとらねばならないだろう。

［付記］本稿は，立命館大学学外研究制度（2003年度後期［B］：2003年９月26日～2004年３月31日），立命館大学研究助成（2003・2004年度［一般研究］）および2003～2005年度科学研究費補助金（基盤研究

［A］・海外学術）「スラム地区住民の自生的リーダーシップに関する地域間比較研究」（研究代表者：江口信清）の助成金を活用して行った現地調査の成果の一部である。記して，関係者，関係機関に御礼申し上げたい。また，フィールドワークのたびごとに世話になる友人のMohd Nizam Bin Ahmadさん，Jayapalan Selvaduraiさん（クアラルンプル市庁），Ramlan Ramliさん（*New Strait Times*図書資料部），そしてオランアスリ村のカンポン＝フル＝パレー出身のRamlee A/L Sonさん，同カンポン＝スンガイ＝ブンブン出身のZailaさんなど，多くの方々から多大なる協力をいただいたことに対して感謝の意を表したい。

注

1）オランアスリは，かつて「サカイ」（Sakai）と蔑称されてきたという。「サカイ」とは，マレー語で「奴隷」・「召使」を意味する。1954年に「原住民法」（Aboriginal People Act 1954）の制定，「原住民局」（Department of Aborigines）の設置を契機として「サカイ」から「原住民」に，さらに1961年に「原住民局」（The Department of Aborigines）から「オランアスリ問題局」（JHEOA: *Jabatan Hal Ehal Orang Asli*=The Department of Orang Asli Affairs）に組織名称が変更されるに伴い「オランアスリ」へと，半島マレーシアの先着民族名称は変遷をみた。しかし，「平地」に暮らす主流社会の人々の彼らに対する眼差しは，今日においても「未開の人々」，「密林の民」，「吹矢で狩猟する人々」あるいは「猿を食する人々」というものであったり，政府によって保護されている人々として「妬み」の対象ともなったりしている。①永島慎司編『アジア読本　マレーシア』，河出書房新社，1993，144頁。②加藤剛「民族と言語」，（綾部恒雄・石川米雄　編『もっと知りたいマレーシア[第２版]』，弘文堂，1994，所収），102頁。

2）1957年にマラヤ連邦として独立して以来，政治的実権を掌握してきたマレー人は，華人やインド系の移民集団の末裔に対して，「ブミプトラ」（*Bumiputera*：大地の子，先住民）であることを，政治社会的意味あいを込めて主張するが，オランアスリは，東マレーシアのサバ，サラワク両州の多くのマレー系先住諸民族とともに，マレー人以前の先着・先住者である。マレーシア政府は，マレー人に加えてオランアスリや東マレーシアの先住諸民族をも「ブミプトラ」という政治的意図から創造されたエスニックカテゴリーに含めてきた。加藤は，ブミプトラを「擬似民族カテゴリー」と呼ぶ。①加藤　剛「『エスニシティ』概念の展開」，（坪内良博　編『講座東南アジア学第３巻　東南アジアの社会』，弘文堂，1990，所収），215～245頁，②加藤　剛：前掲１）②，71～118頁。

3）Jabatan Perangkaan Malaysia: *Profil Orang Asli di Semenanjung Malaysia*; Siri monograf Banci Penduduk No.3, 1997 (Deapartment of Statistics, Malaysia: *Profile of the Orang Asli in Peninsular Malaysia*; Population Census Monograph Series No.3, 1997)。また，2004年２月１日付けの*NST*紙によれば，オランアスリの集落数は840で，人口は少なくとも13万2000人を数えるとされている【*NST* [Nuance]: February 1, 2004: Estuary people: Stepping into the mainstream】。

4）①Hoe B-S.: *Semai Communites at Tasek Bera; A Study of the Structure of an Orang Asli Society*, Center for Orang Asli Concerns, 2001. ②Lim, H-S.: The Land Rights of the Orang Asli, in Consumers' Association of Penang: *Tanah Air Ku: Land Issues in Malaysia*; Consumers' Association of Penang, 2000, pp.170～195. ③Lye, T-P. ed.: *Orang Asli of Peninsular Malaysia; A Comprehensive and Annotated Bibliography*, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 2001. ④Maeda Tachimoto, M.: *The Orang Hulu; A Report on Malaysian Orang Asli in the 1960's*, Center for Orang Asli Concerns, 2001. ⑤Nicholas, C.: *The Orang Asli and the Contest for Resources; Indigenous Politics, Development and Identity in Peninsular Malaysia*, Center for Orang Asli Concerns, 2000. ⑥Nicholas, C.: Mahathir's Invisible Minority; The Orang Asli, in Welsh, B. ed.: *Reflections; The Mahathir Years*, Johns Hopkins University, 2004, pp.220-230. ⑦ Razha Rashid ed.: *Indigenous Minorities of Peninsular Malaysia; Selected Issues and Ethnographies*, Intersocietal and Scientific Sdn. Bhd., 1995. ⑧ラジェンドラン＝ムース『マレーシアにおける先住民族とその疎外政策』，明石書店，2002，101～148頁。

5）JHEOA資料。

6）JHEOAパンフレット，前掲4）⑧。

7）【*NST*: 11 August, 2000: Good intentions alone just not enough in all-out war on poverty】

8）「新村」とは，1950～60年代に半島マレーシアにおける反政府共産ゲリラ対策のために計画的に建設された華人強制移住集落のことであり，周辺地域と隔離するために，KLなど都市の郊外地域にフェンスによって囲まれた方形状のタウンシップが約400村建設された。当然のことながら，現在，その居住環境は大幅に改良されたが華人系貧民集住地区としての性格を残しているケースが多い。

9）「都市貧民」とは具体的に誰を指すのか。それは多様であるが，主に都市部の公有地や私有地を不法占拠しているスクォッター，低価格住宅や市営木造長屋へ再定住した元スクォッターなどが該当する。また，ホームレスや政府が定めた月収（RM230）以下の都市部の極貧世帯も含まれよう。なお，マレーシアのスクォッターをめぐる問題については，以下の拙稿を参照。①「クアラルンプルの生きられたスクォッター・カンポン－1980年代マレーシア都市下層社会の風景－」,（江口信清　編『「貧困の文化」再考』，有斐閣，1998，所収），113～176頁，②「1990年代クアラルンプルのスクォッター問題と再定住政策」,（生田真人・松澤俊雄 編『アジアの大都市［3］クアラルンプル･シンガポール』，日本評論社，2000，所収），91～120頁，③「クアラルンプル大都市地域における外国系スクォッター」,『立命館地理学』12，2000，19～42頁，④「クアラルンプルの都市美化政策とスクォッター―新聞記事に描かれたスクォッター･イメージ―」,（藤巻正己　編『生活世界としての「スラム」―外部者の言説･住民の肉声―』，古今書院，2001，所収），60～93頁。

10）【*NST*: April 14, 2001: Orang Asli homes ready in October】

11）【*NST*: 9 August, 1997: Prisoners of poverty】後述の1991年センサスで示されている数値とは隔たりがある。1991年センサスが悉皆調査であるのに対して，1993年のJHEOA調査は，779の農村集落を対象にした調査であり，都市地域や都市的集落に居住するオランアスリが含まれていない可能性がある。

12）前掲3）

13）前掲3）31～40頁。

14）前掲3）24～29頁。

15）あるマレー・ムスリム男性は「政府はオランアスリをムスリムに改宗させたがっているが，オランアスリはそれを拒否している。彼らは，伝統的な生活文化を依然として良しとする価値観が根強いからだ。なにしろ，いまだに彼らは山野で獣を狩り，猿の肉をおいしいと思っているし，金が入れば酒におぼれているのだから，ムスリムにはなりたくはないのだろう....」と語ってくれたことがある。ちなみに宗教と深く関わる婚姻についてであるが，伝統的な儀礼を保持しているケースが多い。少なくとも婚姻相手には制約がなく（とくに若者の間では），他のエスニックコミュニティ出身者も厭わないという。このことが近年，オランアスリ社会では問題になっているようである。たとえば，外国人労働者が永住許可を得るためにオランアスリ女性と結婚するケースが増えてきているという（いくつかのオランアスリ村での聞き取り，【*Star*: 16 November 2003: Orang Asli find their footing】による）。

16）前掲3）43～50頁。

17）前掲3）５～６頁。

18）①Bunnel, T. and Nah, A.M.: Counter-global Cases for Place: Contesting Displacement in Globalising Kuala Lumpur Metropolitan Area, *Urban Studies* 41-12, 2004, pp. 2447～2467，②前掲4）⑥

19）【*NST*: May 13, 1999: National Move to gazette land meant for Orang Asli lauded】郡別オランアスリ保留地面積は以下の通り。セパン郡には1427.8 ha，クアラ＝ランガット郡2618.2 ha，フル＝ランガット郡1173.7 ha，ゴンバック（Gombak）郡253.7 ha，プタリン（Petaling）郡209.1 ha，フル＝スランゴールHulu Selangor郡2136.5 ha，クラン（Klang）郡35 ha。

20）【*NST*: April 3, 1997: Carey Orang Asli fearful of eviction】

21）前掲4）②・⑤

22）【*NST*: February 14, 2002: HM: Orang Asli pupils can fare better with support of parents】

23）【*NST*: February 13, 2002: Addressing Orang Asli education needs】

24）前掲4）⑤: 24-27.

25）【*NST*: August 26, 1997: Rich legacy losing its wood source】

26）高寺奎一郎『貧困克服のためのツーリズム』，古今書院，2004。オランアスリの伝統的な暮らし方を破壊することなく，彼らに収入源を獲得させるため，彼らの伝統的な住まい方を保持させながら，ツーリストアトラクションとするようなエスニックツーリズムあるいはエコツーリズムの構想や（【*NST*: Octpber 13, 2003: Call to retain traditional features】），パハン州の高原避暑地キャメロンハイランドCameron Highlandsにおけるオランアスリ民宿観光構想が浮上してきている（【*NST*: March 12, 2004: Bed and breakfast with the Orang Asli】）。しかし，それらはオランアスリ社会からの内発的な構想というよりも，政府・ツーリズムセクター・NGOなど外部的働きかけであることが多い。

27）①【*NST*: March 12, 1999: Relocation offer for 75 Orang Asli families】，②【*NST*: September 21, 1999: Dam compensation package criticised】，③【*NST*: October 13, 1999: People Writing from their hearts】

28）【*Star*: 3 February 2004: New neighbourhood for orang asli folk】

29）再定住した両村の家族数は，前掲28）の報道時のそれと異なっていることに注意。グラチ村の場合は75家族から41家族に大幅減，プルタク村では38家族から41家族に増加している。その差の意味や背景は不明だが，再定住時に新村への移住を忌避し他の場所に転住したり，プロジェクト期間中に結婚などで家族数の変動があったりしたことが考えられる。

30）Batinとは，オランアスリ社会における伝統的な首長であり，今日でもその制度は継承されている。現在，バティンは村民から選出されているが，事実上，世襲制であるケースが多い。バティンの村人に対する影響力は今なお強く，政府はオランアスリコミュニティ行政を円滑に進めるために，バティンに対して手当ての支給や，住居の無償提供の場合，ほかの村民よりも部屋数が多い家を付与するなどの特別待遇を供しているという（聞き取りによる）。

31）①【*NST*: April 14, 2001: Orang Asli homes ready in October】，②【*NST*: September 6, 2003: 130 Orang Asli to get new apartments; Desa Temuan, Bukit Lanjan】，③【*NST*: September 8, 2003: 130 Orang Asli get keys to new homes】，④【*MM*: September 8, 2003: 130 Temuans receive apartments】

32）マハティール首相は，「先住民（aboriginal people）が大金持ちになる国はマレーシアを除いてどこにもありません。[…]西洋では，先住民は保留地に追いやられ，酔っ払いになるものだと言われているのです」と述べ，いかにマレーシアの先住民政策が他国に比べ，人道的かつ優れているかを強調したのである【*Star*: June 23, 1999: Showing the Way】。

33）前掲４）⑥，pp. 225-227.

34）前掲４）⑥，pp.227-228.

35）ルフェーブル『空間の生産』，青木書店，2000。

36）メガプロジェクト空間としてのMSCには，オランアスリだけでなく，プランテーションエステートの奥深くで長年暮らしてきたインド系家族などの「忘れられた人々」（the forgotten people）の生活世界が各所に構築されていたことに想いをはせるべきであろう。また，KLIA・プトラジャヤ・サイバージャヤの建設に貢献したインドネシアやバングラデシュなどからの外国人労働者たちの中には，雇主による適切な住宅供給がないためスクォッティングせざるをえず，時おり行われる警察･入管などによる一斉手入れのため逮捕・強制収用所送り・本国への強制送還を余儀なくされた人々もいるのだ。①藤巻正己：前掲９）③，②Cartier, C.: Placing Development; Landscape Transitions in Malaysia, in Hazin Shah *et al*. ed. : *Malaysia at a Crossroads; New Perspectives in Malaysian Studies*, The Malaysian Social Scirncr Association and Penerbit UKM, 2002, pp.300～315，③Bunnel, T.: Re-Viewing MSC; Critical Geographies of Mahathir's High-Tech Push, in Welsh, B. ed.: *Reflections: The Mahathir Years*, Johns Hopkins University, 2004, pp. 406～416，④Bunnel, T.: *Malaysia, Modernity and the Multimedia Super Corridor, A Critical Geography of Intelligent Landscapes*, Routledge Curzon, 2004, pp.131～141.

37）前掲４）⑥，pp. 223-224。政治家の選挙民に対するこうした身振りや素振りは，何もオランアスリに対するだけではない。選挙の季節が到来すると，スクォッターや，ふだん「忘れられた人々」（周辺的コミュニティ）にも同様のふるまいをすることにより，政治家と当該の周辺的民衆との間にあたかもパト

ロン－クライアント＝システムが確立されているかのような幻想をかもしだし，票固めをはかってきたのである。

38）【*NST*: January 5, 2000: Orang Asli: The first Malaysians, not the last】

39）マレーシアにおいて土地の不法占拠問題，土地をめぐるせめぎあいが頻出する最大の理由は，制度上，行政上の問題として，先着民が「無主の地」の占有権を認めてきた伝統的土地慣行から近代的土地制度への切り替えが，英領植民地時代および独立後も全土を通じて徹底的かつ円滑に行われてこなかったことによる。また，州政府の土地登記行政の不透明さや怠慢（審議を含めた事務手続きの遅延の常態化）が，「不法占拠」状態を引き起こしてきたケースが多い。都市スクォッター問題もその好例である。

40）UMNOは，与党連合国民戦線（National Front=Barisan Nasional）の保守系中核政党「マレー人統一国民組織（United Malay National Organisation）」の略称。初代首相ラーマンから第四代首相マハティール，そして現在のアブドゥッラー首相など，歴代首相は，いずれもUMNO総裁でもある。

41）SuhakamのHPアドレス：http://www.suhakam.org.my/

42）前掲35）

43）前掲18）①

44）①【*Star*: November 19, 2003：MB: Perak also gives land to orang asli】，②【*Star*: December 13, 2003: Work stopped on land vital to Semai villagers】，③【*Star*: December 11, 2003: Perak offers to compensate orang asli】，④【*Star*: December 29, 2003: Work stopped on land vital to Semai villagers】。果樹・野菜栽培労働力としてオランアスリを活用すれば，彼らの経済生活はよりよくなるだろうとの考えもあるが，パハン州キャメロンハイランドで問題になっているように，実際には外国人労働者の流入が，オランアスリの仕事を奪っているという現実があることに留意しなければならない（⑤【*NST*: May 17, 2004: Foreigners depriving them of jobs】，⑥【*NST*: July 28, 2004: Orang Asli feeling the pinch as foreign workers cash in】）

45）①【*NST*: January 4, 2004: Making good use of Orang Asli skills】，②【*Star*: January 31, 2004: Protect indigenous traditional knowledge】，③【*Star*: February 3, 2004: For the good of all】

＊文中で略称した新聞名は以下の通りである。*MM*：*Malay Mail*（日刊紙），*NST*：*New Strait Times*（日刊紙），*Star*：*The Star*（日刊紙）

（本学文学部教授）

Orang Asli in the Outskirts of Globalizing Kuala Lumpur: Changing Indigenous Communities and Contest for Their Places in Peninsular Malaysia

by
Masami FUJIMAKI

Malaysia became a newly developed country after the 1990s, under the 'Mahathir Era' of over 20 years, while the mega projects such as 'Kuala Lumpur City Center' (KLCC) and 'Multimedia Super Corridor' (MSC) have been initiated in and around the Kuala Lumpur Metropolitan Area that accompanies the tremendous transformation of landscape. These mega projects inevitably demanded vast project spaces. As a result, the life-spaces or living territories of peoples without registered land titles have legally been taken over under the laws. The Orang Asli, Just like other peoples without registered land title, the so called 'urban squatters', have been ordered to be removed and evicted for a small compensation or under the pretext of a resettlement program to upgrade of their standard of living by the states and JHEOA, the Department of Orang Asli Affairs.

The Orang Asli are the indigenous minority people of Peninsular Malaysia. They are a minority, because even with a population of 132,000 in 2004, they composed only 0.5 % of the entire national population. According to official statistics and documents, they are divided into three groups —Senoi, Proto Malay and Negrito— and further sub-divided into 18 sub-ethnic groups.

Their communities are generally distributed around the border or in the depths of the forests on the mountains and on the coast. Most of the Orang Asli villages are scattered in the central mountain areas in Perak (population: 26,000 as of 1993) and Pahang (34,000), but some Temuan (classified as Proto-Malay) villages are also found in the mountain area of Selangor (10,000) that surrounds Kuala Lumpur as well as in the coastal area of the Straits of Malacca. Their livelihood, which was once confined to the dense forests, has changed drastically since the 1980s. Their 'invisible' and 'forgotten' villages for states and the main stream society, before the beginning of the development era, have been replaced by oil palm estates, new towns, express highways, and the development of dams and resorts. In addition, the construction of the new KL International Airport, the new administrative capital of Putrajaya and the cyber city of Cyberjaya are on the homelands of the Orang Asli.

The Orang Asli have been a special target group since they have been marginalized and left behind in terms of the economic and social development of the country. Therefore, under the name of 'integration into the whole society' policy, they have been resignedly resettled into new villages with new houses, some money and some provisions and without the land titles. Although they are the original or the 'first' inhabitants of the Peninsular Malaysia and have practiced their own customary ownerships and occupation of lands from 'time immemorial', they were unable to acquire and retain the land rights, because their lands belong to state/ Sultan lands. Further, those who do not have any registered land titles under the present land codes have been regarded as 'squatters'. Recently, however, contest for lands between the Orang Asli and states/ the capital have been emerging in this country. The Orang Asli are gradually winning their case by insisting on their customary practices and by mobilizing their geo-histories in the courts in the context with the globally networking of the resistance of the indigenous people.